

〈研究ノート〉

諷刺の性質

三 浦 謙

イギリスの文学批評で、諷刺はこれまであまり本格的に取り上げられたことはない。諷刺に関する本一冊にたいして喜劇はおそらく六冊、悲劇となると多分その倍の十二冊の本が出ていよう。最近諷刺作品への関心が高まる徴候がみられるのは事実である。しかし、諷刺にたいする古い浪漫派の偏見は相変わらず大幅に残っている。諷刺家は破壊的である。諷刺家はすでにあるもの、しかも、多くの人にとって、なに不足ない形で機能しているものを破壊しながら、自らが作りだした空白をかならずしも理めようとはしない。諷刺家はケネス・ティナン⁽¹⁾がバーナード・ショーについて述べているように「壊し屋」なのである。「壊し屋」に向って、作業が終わった時に「あなたは何をつくりましたか」と訊ねるとしたら、それは甚だしく見当違いな質問になろう。ショーの天才は知的スラム街の除去に向いていたので、都市計画には向いていなかったのだとティナンはいつている。

ところで、諷刺について考えるとき、われわれは、かならずしも、ある特定の形式（諷刺詩、諷刺小説、諷刺劇）を念頭においているわけではない。諷刺詩や諷刺小説や諷刺劇を考慮するとしても、われわれは、まだ、多様に変化する個々の作品を論ずる上での便宜上の範疇の域を出ないのである。例えば、『ヒューデイブラス』⁽²⁾『髪盗人』⁽³⁾『ブレイの牧師』⁽⁴⁾『ダンシアド』⁽⁵⁾『スウィフト博士の死に臨んでの詩』⁽⁶⁾等はすべて諷刺詩であるが、程度の差こそあれ、現実の人間や当時の実情に批判的であるという点を別にすれば、これらに共通するものはほとんどない。終始諷刺が行届いているものもあれば、諷刺はほんの時折みられるだけで、複雑な効果を上

げるための一つの要素に過ぎないものもある。諷刺的な作品と諷刺的でない作品とを切り離す線はなかなか引きにくい。その理由は作者のムードが容易にしかも急速に変わりやすいということ。もしくは作品によって諷刺のトーンがほとんど見分けがつかないくらいに稀薄であるということである。したがって、イギリスの諷刺を論ずるさいに、どんな作品でも諷刺がみられれば自由に論じたい。最初から終りまで諷刺が顕著な作品に限定すれば、英文学にみられるきわめて微妙な鋭い諷刺を無視しなければならないからだ。そのさい難しいのは諷刺と喜劇を区別することであると思う。喜劇の作者はふつう諷刺作家と同じ種類の材料を扱っている。諷刺作家のように、喜劇の作者は人間の愚行や不完全さや欠陥にたいへん敏感である。喜劇作者は自分が意織してもしくは無意識的に賛同している基準にわれわれが達しなかったり、喜劇作者自身が受け入れている慣習をわれわれがいちじるしく無視したりすると、その点を見逃さない。喜劇の作者はベルグソンがいうように人間の精神の硬直さに気づくと、小説や劇でその動きを露呈させる。しかし、喜劇の作者は軽やかな気持ちでこれをやっている。喜劇の作者は世の中が豊富に提供して楽しませてくれる先天的な愚行や突飛な言動などを笑って受け入れる。彼らは離れてみたり近くでみたりして人間を観察する一種のバード・ウォッチャーなのであって、喜劇の作者が道義上の問題にわずらわされることがないのは、一般のバード・ウォッチャーがムクドリが餌台に飛来してシジュウガラやゴジュウガラを追い払っても気にならないのと同じ理くつなのだ。確かにこの精神でシェイクスピアはフォールスタッフを描いた。したがって、フォールスタッフは全く道義的な責任をもたない姿となって開花し、愚行を自ら楽しみながら自己陶醉する種族たることが許されている。しかし、だからといって、喜劇の作者が道徳的基準をもちあわせていないということにはならない。喜劇の作者は道義上の判断をする上の絶対的基準をもたないということなのである。道徳的基準に達しないものにたいする喜劇作者の態度は、寛大な気持ちで興味深く見守るところから応揚に受容するところまでいろいろである。人間性に関するかぎり、喜劇の作者は検事よりは弁護士である。

さらにいえば、喜劇の作者が通常座る位置は検事席でも弁護士席でもなく傍聴席なのだ。見たり聞いたりするものを判断はするが喜劇の作者は判決を下したいという強い願望をもたない。ましてや、自分たちが目にした知的な面および道義的な面での無能力者を発きたてたり生贄にしたりする気はないのである。

逆に、受け入れることができなくて、寛容な態度を拒否するのが諷刺家の特徴である。喜劇の作者と違って人間の欠陥に直面したさい、諷刺家は抗議しないではいられない。諷刺家からすれば人間の欠陥はさらけ出さなければならぬ。うむをいわせず嘲笑し、諷刺家自身が思いこんでいる欠陥の見苦しさをみせつけなければならぬ。

ところで、諷刺に通ずる動機は多様である。だが、不変とっていい一つの動機がある。諷刺家は、ほとんどいつも、現在の姿とありうべき姿とのギャップに異常なまでに敏感である。曲ってかかっている絵をみると近寄って直したい気持ちに駆られるように、諷刺家は真理や正義や誠実さからのいかなる逸脱にも注意を向けざるをえない。諷刺家は均衡を回復し、誤ちを正すことを願う。それに、しばしば非道な人間を矯正したり罰したりすることをも容認する。諷刺家は思いきっていか絶叫しなければならぬかのいずれかであるとペルシウス⁽⁷⁾がいうとき、彼のいうことを文字通りわれわれは受けとる必要はないが、この世の諷刺の多くが自然発生的で自己誘発的なすさまじい憤怒の産物であって、諷刺がこのような情念のカルタシスとして機能しているのはまちがいない。

そのさい、諷刺家を大半の他の作家と区別させるのは諷刺家が読者の同意や承認に依存する範囲である。諷刺家自身がカルタシスを果すとすれば、読者を諷刺家に合わせなければならぬ。諷刺家は善悪、正邪についての自身の判断を読者に受け入れさせなければならぬ。つまり諷刺家自身のヴィールスを読者に接種させなければならぬ。実際、少数の読者はおそらくすでに諷刺家と意見を同じくしているだろう。だが、大多数は無関心だから目覚めさせなければならぬ。もしくは、はっきり敵意を示すから、その敵意を転向させなければならぬ。したがって、諷刺の技

法は説得の技法となる。

ところで、説得は修辞学の主要な機能である。OEDが修辞学にあたえている第一の定義は「他人を説得し他人に影響をおよぼすように言葉をつかう技法」である。したがって諷刺は修辞学の重要な一部門となる。喜劇の作者が人間の性格や行動を材料に楽しい型を作りだすのに満足しているさいに、諷刺家は人を説得して賞讃させたり軽蔑させたり、醜悪な事実を直視させたり、表面下に沈んでいるものを見届けさせたり、古くて真実のものに復帰させたり、古くて陳腐なものを棄てさせたり、全く相反することをさせたり——要するに、諷刺家にとって善く思われるものはなんでも見たり考えたり信じさせたりするようにもっていくのである。ただ、個々の諷刺家は気質の面で相互に大きな相違があるのでアプローチの仕方は全く異にしていようが、読者の精神に働きかけて、その考え方や行動に影響をおよぼすという意図の点では共通している。諷刺家があちらこちら訪れる先々で人気がないのは不思議ではない。諷刺家は家々をめぐって、戸をノックしては快い眠りを妨げ、扱いにくくて不快な事実を直視させるからである。

諷刺家を喜劇の作者から別隔てるものが諷刺家の意図にあるとなると、慣習上、喜劇といわれてきたものの多くは諷刺とよびかえるほうが妥当であることがわかれる。

ただ、トリッシーノ^⑧のようなルネッサンス期のイタリアの批評家は悲劇も喜劇も狙いは教導することにある。そして喜劇は醜悪で邪悪なものを愚弄し非難することによって教導するのだと確信していた。五十年後、イタリアの批評家を綿密に読んだに違いないサー・フィリップ・シドニー^⑨はイタリアの批評家と同じ口調で喜劇を論じた。シドニーは喜劇の役目は人間共通の誤りを取りあげて、観る者を堪え難くするほど軽蔑すべき形でその誤りを描くことにあると考えた。シドニーはロンドンの舞台で無頼ぶりを発揮した道徳律廃棄論者のフォールスタッフを知らなかったが、シドニーの喜劇観からすればフォールスタッフは拒否されてくる。シェイクスピアの劇は、シドニーに彼が喜劇から期待する満足感を与えることはまず

なかった。ベン・ジョンソンの劇ならば、まちががなくシドニーを満足させただろう。ベン・ジョンソンの劇では諷刺の目的は決して忘れられていないからだ。

一般論に終始するかぎり、諷刺と喜劇を区別するのに、そう苦勞はない。苦勞なのは個々の作品を考慮するときである。ウィッチェリー⁽¹⁰⁾の『正直者』⁽¹¹⁾は喜劇よりも諷刺であるように思われる。だが、『田舎の女房』⁽¹²⁾は諷刺というよりは喜劇である。メレディス⁽¹³⁾は『エゴイスト』⁽¹⁴⁾を喜劇だといっている。しかし、多くの読者は諷刺と思うだろう。『ドン・ジュアン』⁽¹⁵⁾は明らかに諷刺だが、時には純粹な喜劇となる。喜劇の作者は道義上の中立を失うと諷刺家になり、諷刺家は読者をコントロールする力を緩めると喜劇作者になる。

エドワード・ヤング⁽¹⁶⁾は歴史家は最も苛酷な諷刺家であるといっているが、事実を語るだけでは諷刺家とはいえない。諷刺家は人が無視するものを強引に見させ、幻想や虚飾をつぶし、仮面をもぎとり、裸の事実をさらすのである。

しかし、ここに一つ混み入った問題がある。モノゴトの表面下に沈んでいるものをわれわれに見させたり、われわれがこれまで忘れてたり無視したりしてきたものに注意を向けさせたり、馴染みのものを新しいショッキングな観点から眺めさせたりするのは諷刺家ばかりではない。コウルリッジがやっているように人間を嗜眠から目覚めさせて日常生活にみられるもろもろの出来事の意義を知覚させたのはワーズワスである。ワーズワスほどモノゴトの核心を見究めようとした詩人はいない。ワーズワスはきまって紛飾を剥ぎとることによって、諷刺家と一見似た方法で本質的なものを捉えようとした。例えば、『白痴の子供』⁽¹⁷⁾という詩で、ワーズワスは涎れをたらず白痴の子供と同じように知能の低い口やかましい母親を描いたが、彼の真意は愚かな子供への盲目的な母親の愛情を訴えることにあった。ワーズワスにとっては、詩人は愛情をもち幸せである時、詩人の感情が生きている万物と一体となって振動している時、最も高度に対象を受容できる。諷刺家のように、批判的であったり敵意をもったり軽蔑したりしてい

る時には決して全体的な視野をうることはできない。バイロンは別にして、イギリスのロマン派の詩人たちが諷刺をなおざりにしたこと、シェリーのように諷刺を手がけても拙劣であったことは興味深い。

ワーズワスとトルストイは調和と深い喜びで絶えずさまざまの発見をしている。彼らには隠れていたものを突如顕現させる閃めきがある。諷刺家には、めったにこのような閃めきがない。諷刺家も隠れていたものを露わにするが、諷刺家がわれわれに示すものは、かねがね諷刺家が知悉しているもので、その狙いは否応なしに、われわれの目をその方に向けさせることにある。もし諷刺家に閃めきがあるとすれば、それは目的よりも手段に関してである。諷刺家には何をいうかではなく、どういうかという点について閃めくものがある。イングランドのアイランドへの対応についてスウィフトが「つつましやかな提案」で示した方法がそれである。

しからは、諷刺家は何をみるか。真実そのものではなくて真実の一面であり、人間の全人格ではなくて人間の一面に過ぎない。諷刺家は徹底的に単純化し視野をせばめて、全体像を描くとすれば考慮しなければならない大きな部分を排除する。その最も極端な形がカリカチュアである。諷刺家はこの単純化を隠すために、いろいろな手を使う。観客の目に目つぶしを投げたり、もっともらしいものを呈示して観客を魅了したり、機智で観客を娛ませて諷刺家の主張に疑問をいまく間を与えないようにするといった風に。バーナード・ショウはこれらの方法をたてつづけに使って、イギリスの中産階級の人間に、彼らの見解と行為の基礎となる道義上の前提を再考するよう促したのである。ショウは数世代の知的風土を変容させる上で力となった。そのさい、ショウに諷刺の歴史上まことに珍しい陽気さと魅力が具っていたのはプラスであった。しかし、不合理なものをおもしろおかしく際限なしに曝けだすさいに、ショウは諷刺家の流儀に倣って人間の本性を無視しようとしている。ショウが『メトセラへ還れ』⁽¹⁸⁾で破壊から建設に向う時、冷静で100パーセント合理的でかろうじて人間といえる古代人——フウイヌムのような賢者——を設定している。だが、諷刺家は自分が破壊するものの代替物を産みだす義務を感じていない。われわれ

はスウィフトのフイヌムとショウの古代人が理想的な人間像を具体化していると考えてはいけない。『ガリバー旅行記』の第四篇からいえることは、フイヌム的な面が増してヤフー的な面が少くなれば、人間ははるかにましになるだろうということである。

では、諷刺家が習性として単純化し誇大化するならば、諷刺家が人間の性格の一面だけしか扱わないとすれば、諷刺家は人間関係の複雑さを弁えない粗野な人間と見做してよいのであろうか。たしかに、アリストファネス⁽¹⁹⁾、ペルシウス、ベン・ジョンソン、サミュエル・バトラーといった諷刺家は逞しい明晰な頭脳をもっていたように思える。それに彼らはきわめて自信が強く、精力的である。だが、その不屈の気質は主に激しい性格と飾り気のない常識からでてくる。ジョンソンやバトラーには精妙なところがない。生活の表面下に沈んでいるものを僅かに意識しているだけである。彼らは銃身が二本ある銃で空飛ぶ鳥を射ち落とすが、どちらかという鳥は大型で飛び方はぶざまであるにちがいない。道徳基準が比較的固定している安定期には、多くの粒の小さい人間が社会に順応することによって信頼をかちえて、群から脱落する人間を諷刺する。このような人間は必ずしも馬鹿ではないが、まず一級の人物ではない。十八世紀には、こうした人間が黒イチゴと同じくらいありふれていた。

また、これとは別種の諷刺家がいる。ホラチウス⁽²⁰⁾、エラスムス、スウィフト、ポープ、ヴォルテール、ジェイン・オースティン、フローベル、ショウといった連中である。彼らは決して粗野ではない。彼らは明白なことばかりでなく、すべてのことに目を開いている。彼らの知性は精妙であり、諷刺はするどい。しかし、諷刺家であるかぎり制約を受けなければならない。彼らも不都合なものには目を塞がざるをえないのである。

ウォルター・ペイター⁽²¹⁾はコウルリッジにかんする論文の中で、近代の知性が古代の知性と異なるのは、絶対性の代りに相対性を涵養することにあると述べている。もし、ペイターの主張を受け入れるとすれば、諷刺家の将来はどうなるのであろうか。何人が諷刺家の自信にみちた判断に耳を傾け、何人が諷刺家の徹底した単純化に共鳴するのであろうか。

現代の各種の徴候からして、これまで以上に諷刺家は必要になってこよう。都会化が進み群居性が強まるにつれて、われわれはマスコミや大衆文化の宣伝に災いされて愚かになっている。ピーコック⁽²²⁾は十九世紀の始めにこの傾向を意識し、イヴリン・ウォー⁽²³⁾は『恋する人たち』⁽²⁴⁾ その他でこうした同時代の姿を諷刺した。科学知識が進み人間の生活が応用科学によってますます条件化されるにつれて、人間は個性を棄て目的のための手段になる。多くの作家がこの点について警鐘を鳴らしてきた。オールダス・ハックスレーは『すばらしき新世界』でありうべき未来像を描いた。現代の諷刺はある程度まで個人から人間一般に移ったといえよう。諷刺のスペクトル分析は片や毒舌の赤から片や最もデリケートなアイロニーのヴァイオレットにまで及ぶといわれているが、これからの諷刺では毒舌はもはや流行らない。諷刺家の知性と想像力に参画する知識人である諷刺の読者は諷刺家の一方的な否定をしりぞけて肯定的な意義を要求するだろう。したがって、諷刺の見方は粗野で人間関係のデリケートな分析には向かないという見解は通じなくなる。げんにジェーン・オースティンやジョージ・メレディスのアイロニカルなモノ想いには、むしろ対象への適確な判断がみられるからだ。

それに、これからの諷刺家には、後の祭りにならないうちに人間の運命をあらためて考え直させることがもとめられている。晩年のジョージ・オーウェルに『アニマル・ファーム』や『一九八四年』を書かしたのはこうした事情からであった。われわれは先人よりもたくさんモノを知っているし、たくさんモノを知る手段も持ち合せている。だが、おそらく、われわれのほうが賢明ではないだろう。

したがって、これからの諷刺が、博物館に収められている恐竜や翼竜ではなく、現存の生き物として、将来の文学で缺かせない役割を演ずるのは必至であろう。

備考：本稿は *James Sutherland; English Satire (1956)* の一篇 *The Nature of Satire* の忠実な訳稿にあらず。けだし adventurous な抽出というべきか。

注

- (1) Kenneth Tynan 生没年未詳.
- (2) *Hudibras* (1662-78).
Samuel Butler 作. Don Quixote の構想を借りて非国教徒を冷笑した諷刺詩。
Hudibras はせむしで頑迷な長老会派の保安官。スウィフトは *Hudibras* を愛読した。
- (3) *The Rape of the Lock* (1712-14).
Alexander Pope 作. Robert が美人 Arabella の髪を盗んだため両家の争いとなる。そこで、両家を和解させるためポープはこの諷刺詩を書いた。
- (4) *The Vicar of Bray*
Henry 8 世から Elizabeth 1 世までの治世に新教あるいは旧教に 4 回も改宗したといわれる Berkshire 州 Bray の助任司教をうたった 18 世紀の俗謡。
- (5) *The Dunciad* (1728-43).
Alexander Pope 作. ポープを攻撃した Shakespeare 学者 Theobald や劇作家 Colley Cibber を嘲弄し、ついでに当時の文筆家の悪徳を暴露している。
- (6) *Verses on the Death of Dr Swift* (1739).
Jonathan Swift 作.
- (7) Aulus Persius (34-62).
ローマの諷刺詩人.
- (8) Giovanni Giorgio Trissino (1478-1550).
イタリアの学者.
- (9) Sir Philip Sidney (1554-86).
イギリスの詩人, 政治家. スウィフトはシドニーの *The Defence of Poesy* (1595) を必読の書として人にすすめている。
- (10) William Wycherley (1640?-1716).
イギリスの劇作家.
- (11) *The Plain Dealer* (1677).
Molière の *Misanthrope* が下敷きになっている。
- (12) *The Country Wife* (1675).
Wycherley 作.
- (13) George Meredith (1828-1908).
イギリスの作家, 詩人.
- (14) *The Egoist* (1879).
- (15) *Don Juan* (1819-24).

Byron の未完の諷刺詩.

- (16) Edward Yuong (1683-1765).

イギリスの詩人. *The Complaint, or Night Thoughts on Life, Death, and Immortality* (1742-5).

- (17) *The Idiot Boy*.

Coleridge との共作になる *Lyrical Ballads* (1798) に収められている.

- (18) *Back To Methuselah* (1918-20).

理想的な社会を実現するためには、人間は旧約聖書に出るメトセラのように900歳まで生きなければならないという.

- (19) Aristophanes (448?-380? B. C.).

- (20) Horace (65-8 B. C.).

ローマの詩人.

- (21) Walter Horatio Pater (1839-94).

イギリスの批評家. 1866年, *Westminster Review* 誌に, 批評家としてはじめて *Coleridge* 論を発表した.

- (22) Thomas Love Peacock (1785-1866).

イギリスの作家, 詩人.

- (23) Evelyn Arthur St. John Waugh (1903-66).

イギリスの作家.

- (24) *The Loved One* (1948).

Hollywood を舞台にした諷刺小説. *The Loved One* は死人を指す葬儀屋の隠語。日本語の「仏様」の意味.